



井上ひさし



小曽根真

## 小曽根 真さんが語る井上ひさしさんとの思い出

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

井上ひさしさんが亡くなられたのは、今年の4月のことです。劇作家として、文学者として日本を代表する井上ひさしさんは、市川に長年住んでいたこともあり、市川市文化振興財団理事長として、市川の文化芸術のあり方について、多くのご助言をいただきました。ピアニスト小曽根真さんとの出会いのきっかけもいただきました。そのような小曽根さんに、今回は井上ひさしさんとの思い出をお話していただきましょう。

### ★井上ひさしさんと初めてお会いになったのはいつですか？

2000年の秋だったと思います。山形で開催される「国民文化祭・やまがた」のために曲を書いてほしいと、非常に丁寧な依頼を受けました。新国立劇場2階のマエストロという喫茶店で、2時間くらい先生とお話しました。山形交響楽団との協演でピアノコンチェルトを書いてほしいと依頼されたのです。僕は「書けません」とすぐにお返事しました。「ビッグバンドなら書けますが、ダブルリードのオーボエやファゴット、弦がある管弦楽団用の曲など作ったことはないのです、無理です」とお断りしました。でも先生は、3年ありますから、大丈夫ですよ、と仰るのです。確かに勉強すれば、と考えなおし、お引き受けました。すると、先生は演奏のほかに指揮もするように、と言われました。「それはいくら何でも無理でしょう、相手はプロのオケですから」とお断りしました。でも井上先生は、僕が書いた曲を、どんなに素晴らしいコンダクターが振っても、僕の音楽性をそのまま理解できないだろうから、だから僕に全てやってほしいと、仰るのです。でもそれはあまりにも大変なことなので、この話を持ち帰らせてくださいと、言いましたら、先生は「ためです、今OKをいただかない限り私は帰しません」と。これが10年前のことで、それから先生と親しくさせていただくようになったのです。

### ★こまつ座のお芝居の看板女優、神野三鈴さんは奥さまですが、

その奥さまと井上さんは小曽根さんより先にお知りあいだったのですか？

神野三鈴はこまつ座の俳優ではなく、フリーで活動しています。井上先生と初めてお会いしました前後に、ちょうど、パルコで「おやすみ こどもたち」というお芝居で音楽を僕がやっていて、妻が出演していたのですが、そこに先生がいらしてくださいました。すぐに先生から電話がかかってきて、「神野さんにいい役を書きましょう」と。家に帰って家内にそう言いますと、井上ひさしさんが当て書きしてくださいるなんて、役者として、これ以上の幸せはないと、まさに狂喜乱舞しました。それが2000年の先生とお会いしたころで、2人とも新しい命をいただいたということですよ。

### ★小曽根さんは、こまつ座の「組曲 虐殺」で音楽を担当なさり、舞台上のグラントピアノで演奏なさって、大変に評判になりましたね。

このようなことも含めて、井上さんから、どのような影響を受けられたのでしょうか？

井上さんと出会う前、音楽が存在する意味について考え、音楽を奏でるときに、何が大事なのか？自分は何を表現しているのだろうか？と、自分の中にぽっかり空いた部分があると感じていました。音楽は感情を込めて演奏するようにと学ぶのですが、ピアノは人間の心から非常に遠いところにある楽器です。一番近いところにあるのは声で、管楽器、ヴァイオリンと、楽器によって心との距離がだんだん離れるように思えるのです。ピアノは自

分から近づいて行かなければならないということで、どうしたらいいのだろうと思っていました。そんなことをいつも考えるようになっていたときに、先生と出会うことができました。先生から教えていただいたのは、言葉の素晴らしいことです。言葉って、こんなに人の心を動かせるんだ、ということをごまつ座の芝居を観て、感じたわけです。先生の持っていらっしゃる書物の量からして分かるように、井上先生の日本語は、どんなセリフや言葉も、本当に選りすぐって書かれているのです。だから命を削って書かれたセリフ、聞いている僕らへのその届け方というのが、あまりにもすごくて、感動的なのです。感動という言葉では表せないのですが、先生によって、日本語の素晴らしいさをもう一度発見させていただきました。言葉は音楽にくらべると制限があるのではと、それまで思っていました。言葉は言葉の芸術がそこにあって、伝えるべきエネルギーが宿っており、全て努力をすれば伝わるんだということをすごく感じました。そして、自分が音楽を弾くときに、何か伝えたいものがあり、そのためにはもっとも自分を裸にしていかなければいけないんだと思いはじめました。自分らしさを出すことが一番肝心だと分かったんです。自分の中の空白だった部分が、だんだん埋まってきました。ただ、死ぬまで道のりは長いだろうと、でも間違っていないと思いました。大切なのは結果よりも、そこに向かっていく努力であり、試行錯誤です。そのエネルギーがアーティストにとっては一番大事、その部分をお客さんと共有していかなければならないと思えるようになったのです。

### ★井上先生はお亡くなりになりましたが、来年のこまつ座公演「日本人のへそ」で、小曽根さんは「組曲 虐殺」に続いて、ピアニストとして出演なさいますか？

ピアノが舞台上にずっとあり、僕が役者としてステージに出なければならぬ。山田というピアニストの役です。セリフはありませんが。

### ★演劇人とのコラボレーションと、ミュージシャンとのコラボレーションとの違いや共通点をどのようにお考えですか？

共通点は多いです。音楽も突き詰めると「呼吸」です。音楽と日本語という二つの言語が共存するのが、井上先生の舞台じゃないかな。歌になり、セリフになり、そこに僕が音楽で絡む。井上先生は台詞に音楽をつける事で何ページもの物語を表現する事が出来るとおっしゃっていました。

### ★もし井上さんが、ここにいらっしゃるとしたら、何をお話しになりたいですか？

コンサート、どうしましょうか？と伺いたいですね。先生が「虐殺」の執筆中に、冗談まじりのファックスをやりとりしていたのですよ。脚本を書いていらっしゃる先生の気持ちが煮詰まるでしょうから。そのお返事の一つに、「僕が歌詞を、小曽根さんが曲を書いて、コンサートやりたいです」と書かれていたのです。だから、先生がいらしたら、「あのコンサート、どこでやりましょうか？」って、伺いたいです。

### ★では次回作「日本人のへそ」の音楽について、もう一度、お話していただけますか？

前半はほとんど音楽です。セリフはズーズー弁。東北弁？岩手弁なんです。でも僕はこの方言にはなじみがない。想像はできるけれども、メロディーが分からない。方言指導の方にセリフを読んでください、読んだものを録音してください、とお願いしました。夏のヨーロッパツアーに持って行って、帰国後、9月あたりに作曲を始めようかなと思っています。

(聞き手 小坂裕子 7月9日 銀座にて)